

### 第3問

次の文章は『玉水物語』の一節である。高柳の宰相には十四、五歳になる美しい姫君がいた。本文は、花園に遊ぶ姫君とその乳母子の月冨を一匹の狐が目にしたところから始まる。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

折節この花園に狐一つ侍りしが、姫君を見奉り、「あな美しい御姿や。せめて時々もかかる御有様を、よそにても見奉らばや」と思ひて、木陰に立ち隠れて、(ア)しづ心なく思ひ奉りけるこそあさましけれ。姫君帰らせ給ひぬれば、狐も、かくてあるべきことならずと思ひて、我が塚へぞ帰りける。つくづくと座禅して身の有様を覩するに、「我、前の世いかなる罪の報にて、かかるけだものと生まれけむ。美しき人を見そめ奉りて、およばぬ恋路に身をやつし、Aいたづらに消え失せなむこそうらめしけれ」とうち案じ、さめざめとうち泣きて臥し思ひけるほどに、よきに化けてこの姫君に逢ひ奉らばやと思ひけるが、またうち返し思ふやう、「我、姫君に逢ひ奉らば、必ず御身いたづらになり給ひぬべし。父母の御嘆きといひ、世にたぐひなき御有様なるを、いたづらになし奉らむこと御いたはしく」とやかくやと思ひ乱れて明かし暮らしけるほどに、餌食をも服せねば、身も疲れてぞ臥し暮らしける。もしや見奉るとかの花園によるほひ出づれば、人に見られ、あるは飛礫を負ひ、あるは神頭を射かけられ、いとど心を焦がしけるこそあはれなれ。

なかなか露霜とも消えやらぬ命、もの憂く思ひけるが、(イ)いかにして御そば近く参りて朝夕見奉り心を慰めばやと思ひめぐらして、ある在家のもとに、男ばかりあまたありて女子を持たで、多き子どもの中にひとり女ならましかばと朝夕嘆くをたよりにて、年十四、五の容貌あざやかなる女に化けて、かの家に行き、「我は西の京の辺にありし者なり。無縁の身となり、頼む方なきままに、足にまかせてこれまで迷ひ出でぬれど、行くべき方もおぼえねば頼み奉らむ」と言ふ。主の女房うち見て、「いたはしや。徒人ならぬ御姿にて、いかにしてこれまで迷ひ出でけむ。同じくは我を親と思ひ給へ。男はあまた候へども女子を持たねば、朝夕欲しきに」と言ふ。「さやうのことこそ嬉しけれ。いつこそ指して行くべき方も侍らず」と言へば、なのめならず喜びていとほしみ置き奉る。いかにしてさもあらむ人に見せ奉らばやといとなみける。されど、Bこの娘、つやつやうちとくる気色もなく、折々はうち泣きなどし給ふゆゑ、「もし見給ふ君など」候はば、我に隠さず語り給へ」と慰めければ、「ゆめゆめさや

うのことは待らず。憂き身のめざましくおぼえてかく結(注5)はれたるさまなれば、人に見ゆることなどは思ひもよらず。ただ美しからむ姫君などの御そばに侍りて、御宮仕へ申したく、侍るなり」と言へば、「よき所へありつけ奉らばやとこそ常に申せども、さも思し召さば、ともかくも御心には違ちがひ候ふまじ。高柳殿の姫君こそ優にやさしくおはしませば、わらはが妹、この御所に御(注4)非上(注4)にて候へば、聞きてこそ申さめ。何事も心やすく、思されむことは語り給へ。違へ奉らじ」と言へば、いと嬉しと思ひたり。

かく語らふところに、かの者来たりければ、この由を語れば、「そのやうをこそ申さめ」とて、立ち帰り御乳母にうかがへば、「さらばただやがて参らせよ」とのたまふ。喜びてひきつくるひ参りぬ。見様、容貌、美しかりければ、姫君も喜ばせ給ひて、名をば玉水の前とつけ給ふ。何かにつけても優にやさしき風情して、姫君の御遊び、御そばに朝夕なれ仕うまつり、御手水参らせ(注5)供御参らせ、月冨と同じく御衣の下に臥し、立ち去ることなく候ひける。御庭に犬など参りければ、この人、顔の色違ひ、身の毛一つ立ちになるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。

「あまりけしからぬ物怖ぢかな」とこの人の御おぼえのほどの御うらやましさを「など、かたはらにはねたむ人もあるべし。かくて過ぎ行くほどに、五月半ばの頃、ことさら月も隈なき夜、姫君、御簾みすの際近くるさらせ給ひて、うちながめ給ひけるに、ほととぎすおとづれて過ぎければ、

ほととぎす雲居のよそに音をぞ鳴く

と仰せければ、玉水とりあはず、

深き思ひのたぐひなるらむ

やがて「わが心の内」とぐちぐち(注6)申しければ、「何事にかあらむ、心の中こそゆかしけれ。恋とやらむか、また人に恨むる心などか。あやしくこそ」とい、

五月雨のほどは雲居のほととぎす

誰がおもひねの色をしるらむ

(注)

- 1 神頭——鎌やじりの一種。
- 2 在家——ここでは民家のこと。
- 3 結ばれたるさま——気分がふさいで憂鬱なさま。
- 4 非上——貴人の家などで働く女性。
- 5 供御——飲食物。
- 6 ぐちぐち——いさよいさよ。口くちいいちちももののいいふふ言ことばひひなな井い。

問2 波線部 a ～ d の敬語は、それぞれ誰に対する敬意を示しているか。その組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- |   |      |      |      |      |      |
|---|------|------|------|------|------|
| ⑤ | a    | a    | a    | a    | a    |
|   | 姫    | 姫    | 姫    | 狐    | 狐    |
|   | 君    | 君    | 君    |      |      |
| ④ | b    | b    | b    | b    | b    |
|   | 娘    | 娘    | 見給ふ君 | 娘    | 見給ふ君 |
| ③ | c    | c    | c    | c    | c    |
|   | 娘    | 主の女房 | 娘    | 主の女房 | 娘    |
| ② | d    | d    | d    | d    | d    |
|   | 玉水の前 | 姫君   | 姫君   | 姫君   | 玉水の前 |
| ① | e    | e    | e    | e    | e    |
|   |      |      |      |      |      |

誰に対する敬意か

地の文 a

もしや見奉ると

解答は

4

もしかしたら 見申上ゲルカト

52	見	見	見	見	見	見
見よ	見れ	見ろ	見ら	見り	見ら	見ら
命令	已然	連体	終止	連用	未然	一般

15	奉	奉	奉	奉	奉	奉
奉れ	奉れ	奉る	奉ら	奉り	奉ら	奉ら
命令	已然	連体	終止	連用	未然	一般

50	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か
命令	已然	連体	終止	連用	未然	一般

もし

謙讓の補助動詞

見奉る

狐

姫君

動作の受け手

読み手

作者

誰に対する敬意か

姫君

作者

主の女房の会話

「もし見給ふ君など候はば、我に隠さず」

b

もし結ばれなさる

君 ナド ゴザイマス ナラバ、

17	君	君	君	君	君	君
君	君	君	君	君	君	君
命令	已然	連体	終止	連用	未然	一般

1	候	候	候	候	候	候
候へ	候へ	候ふ	候ふ	候ひ	候は	候は
命令	已然	連体	終止	連用	未然	一般

46	ば	ば	ば	ば	ば	ば
ば	ば	ば	ば	ば	ば	ば
命令	已然	連体	終止	連用	未然	一般

丁寧の本動詞

君など候はば

断定連用形

主の女房

話し手

聞き手

娘

誰に対する敬意か

娘

主の女房

娘の会話 「~~~~御宮仕へ申したく侍るなり。」

御宮仕へ申したく侍るなり。

聞き手 ← 話し手

主の女房 ← 娘

誰に対する敬意か

主の女房 ← 娘

丁寧の補助動詞

謙讓の補助動詞

宮仕え 申シアゲ タイ ノテ ゴザイマス。

御宮仕へ

5	宮仕へよ	命令	已然	連体	終止	連用	未然
15	申せ	命令	已然	連体	終止	連用	未然
30	たけれ	命令	已然	連体	終止	連用	未然
16	侍れ	命令	已然	連体	終止	連用	未然
43	なれ	命令	已然	連体	終止	連用	未然

御宮仕へ 申し

御宮仕へ 申さ

御宮仕へ 侍る

御宮仕へ 侍り

御宮仕へ 侍ら

御宮仕へ なり

御宮仕へ なり

御宮仕へ なら

地の文 供御参らせ、

お食事を サシ上げ、

謙讓の本動詞

謙讓の本動詞

一語化

誰に対する敬意か

姫君 ← 作者

誰に対する敬意か

姫君 ← 作者

動作の受け手 姫君 (玉水の前)

作者

読み手

参らせ

5	参らせよ	命令	已然	連体	終止	連用	未然
17	供御	命令	已然	連体	終止	連用	未然

参らせ

1	参れ	命令	已然	連体	終止	連用	未然
18	せよ	命令	已然	連体	終止	連用	未然